

## 「国語Ⅰ」における古文入門期指導試案

菅 原 敬 三

### 一

昭和五七年度から高等学校学習指導要領の改訂に伴い、国語科の科目が「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」「現代文」「国語表現」「古典」となり、標準単位がそれぞれ4・4・3・2・4となったのは周知のとおりである。昭和六十年度から使用された教科書も、教材の三分の一改訂が行われ、新教育課程もやや定まった感がある。教科書の改訂を機に古文の入門期指導のあり方と試みについて私見を述べてみたい。

### 二

古文の入門期指導のあり方を考える前に、今回の改訂の中心的な位置を占めている「国語Ⅰ」の性格を今一度整理しておきたい。

① 国語の基礎的・基本的な能力を身につけさせる科目

である。

② 従前の「現代国語」と古典に関する科目の基礎的な内容を整理して構成された総合的な科目である。

③ 「表現」「理解」「言語事項」の二領域一事項から構成される科目である。

④ 中学校国語との関連を密接にしながら、その内容を更に発展させた科目である。

⑤ 原則として第一学年において全員に履修させるものであり、選択科目「国語Ⅱ」・「国語表現」・「現代文」・「古典」の学習の基礎となる科目である。

以上は、広島大学附属高等学校国語科が「『国語Ⅰ』の実践的研究」を進める上でまとめたものであるが（広島大学附属高等学校「国語科研究紀要」第十一～十五号）、中でも②と④が注目されるところである。

「国語Ⅰ」が設定された背景には、高等学校への進学率が九十パーセントを越え、多様化した生徒を前に国語科としていかに応えるか、また、「ゆとり」のあるしかも充実し

た学校生活を送れるようにする」(答申)ために、削減された各教科の標準単位数の補いをいかに有効にするかという問題があったのである。

「国語Ⅰ」の性格の②で述べられた「総合的な科目」をめぐり、各地で開催された研究協議会の席では幾多の議論がなされたところである。何をもって「総合」と呼ぶか、どのような「総合」化の方法があるのかというのが、議論の焦点だったのである。広島大学附属高等学校国語科の行った方式は、一つの主題の下に「現代文」「古文」「漢文」を「総合」する、いわゆる「主題单元による総合化」であった。当時、私もその推進者の一人であったが、この方式がとられた背景には、

国語を「現代国語」と古典に関する科目とに分けて履修する方式は、従来長く行われて相当の成果を上げてきたが、本来両者は、連続した言語文化として把握されるべき一面を持っており、両者を別個に学習すると、その共通性、連続性の面が見失われるおそれがある。殊に古典を学ぶ初歩の段階では、連続性を保った形で学習する方が自然で無理なく学習でき、また総合的に扱う方が両者の学習量や進度を適宜調整できるという利点もある。(「高等学校学習指導要領解説 国語編」文部省 9ページ)

という指導要領の考えが踏まえられていた。

以上の点で、古典も入門期から「総合化」の問題を考えざるをえなくなっているのだが、また次のようなことも伝えられていた。つまり、教育課程改革の国語教育審議会の席上、古文学習無用論が出された、それを抑えるためには古文学習の必然性が見出さなければならぬ、そのために考え出されたのが「国語Ⅰ」の「総合化」であったということである。本来、作品は作品としての独自の世界を持つからこそ、作品としての生命や価値を持つのである。古典の作品であれ、現代の作品であれ、いずれも作品である以上その本質的な特質から逃れられるものではない。しかも古典の作品は、いずれも現代の作品とは無関係に存在するのである。古典は古典としての独自の生命を持つからこそ、読んでいて面白いのである。それを敢て「現代国語」と古典との「総合」的学習に活路を見出そうとしたところに、「国語Ⅰ」が提言された苦悩がある。古文の授業の形骸化した理由が、訓詁注釈による本文の読解、それに付随した文法指導への偏りであったことはよくいわれている。内容面に注目して、形骸化した古文の学習の活性化を図ろうとしたのが、広島大学附属高等学校国語科の「主題单元による総合化」の試みであった。一つの主題の下に「現代文」も「古典」も見ようという欲張った試みであり、作品本来の主題とは異なった視点からの作品への接近という点はあったにしても、それが直ちに作品の生命を奪うということ

にはならないのである。当然幾つかの課題が残されてはいるが、「形骸化した古文の学習の活性化を図る」点に視点を当て、古文の学習を身近なものにした点は評価されてよい。そして、その課題を克服しつつ「総合化」の試みがなされ、その実践報告が各地の研究大会で報告されている。

### 三

ここでは、「国語Ⅰ」の教科書に見られる古文入門の単元・教材の実際を見、分析を通して、古文入門のありかたを考え、試案を提示したい。いつからいつまでを入門期ととらえるかという問題があるが、一応古文の第一単元をもって入門期と考えることにする。教科書の古文入門期の教材を見る前に、古文の入門期には、どのような指導方法があるのか、考えておきたい。

- 1、「古典を読む意義」「古典の魅力」「日本人の季節感」などを解説した文章を利用して古典の思想や情感に接近していく方法。
- 2、平易簡明な作品を利用して、古典に親しませる方法。
- 3、郷土の文学を利用することによって、古典への道案内を行う方法。
- 4、単元を組み、現代と古典の世界の関連を図る方法。
- 5、身近な題材に古語を見付け、古典の入門を行う方法。

- 6、お伽話と原話との比較を通して、古典の特質を明らかにする方法。

などが有効な方法であろうか。

では、「国語Ⅰ」の教科書の古文入門期の実際は、どのようなになっているのか見ていきたい。資料1（昭和五十七年度版 古文入門期教材一覧表）のように昭和五十七年度版 三社十七種類の教科書が出されているが、その特徴は大きく分けて二つに分類できる。解説文の有るものと無いものである。この解説文の有無は昭和六十年年度版の教科書にも受け継がれている。

解説文のほとんどが教科書のために書き下されたものであり、その中身は「古文を読む意義」「古文の魅力」等について解説したものである。本格的なものから古語と現代語の違いなどを概説したものまで多様である。秋山虔氏の「古典を読む」は、言葉の特徴から古文の内容まで源氏物語を例にとりながら本格的に解説したもの。斎藤雅子氏の「古典への道案内」は、「こぶとりじいさん」や「すずめの恩返し」を例に、登場人物を初めからいいおじいさん、悪いおじいさんと決めてかからず、生の人間を描いているのが古文の特徴であると説いたもの。田中澄江氏の「春はあけぼの」は、「枕草子」の「春はあけぼの（第一段）」を例にとり、作品分析をしながら鑑賞までを書いたものである。解説文全体にわたって言えることは、「今から何を学

べばいいのか」「現代人はどのように古文を見ていけばいいのか」といった「古文学習の意義」と、「古文の表現の特徴」を解説したものとなっている。

しかし、解説文の扱いについては、注意を要するよう思う。結局書かれている内容が高等学校の古文の学習を通じて最終的に到達すべき内容とだぶるからである。また解説文の内容を知ることが古文入門期教材の読解に速効性を持つわけでもない。古文の特質を詳しく解説したものは、古文の学習のまとめの段階で使用した方が効果的なのではなからうか。それに、解説文の有無が古文入門期の教材を選定する上で影響を与えているということもないようである。資料1、2（昭和六十年版 古文入門期教材一覽表）のA、Bを比較しても教材間に顕著な違いは見られない。つまり、解説文の利用は利用する時期と利用の仕方に配慮する必要があるということである。

次に、古文入門期の教材について見ていきたい。その実際は、資料1、資料2のごとくである。

各出版社から出されている編成趣意書によれば、入門期の教材選定の基準はおおむね次の二点にまとめられる。

1、定評ある教材で、しかも現場でも高い評価を得ているもの。

2、平易で古文に親しみが持てるもの。

資料1、2の教材を概観すれば、右の1、2の趣旨が踏

まえられているのがよくわかる。説話では「宇治拾遺物語」、物語では「竹取物語」が圧倒的に多く採用されている。この両作品は入門期以降の單元にはほとんど姿を見せなくなるから、いかに入門期に定着した教材かがわかる。内容で整理してみると、全般的に人事面での面白さを基調としている。

1、作中人物の行動の壮絶さ・秀拔さ……「絵仏師良秀」「馬盗人」「亀山殿の水車」「姥捨」「木曾の最期」など

2、作中人物の行動の意外性……「安養の尼の小袖」「太田道灌歌道に志す」など

3、作中人物の行動の滑稽さ……「児のそら寝」「仁和寺にある法師」「楊梅大納言頭雅卿の失言」など

4、物語的な世界の面白さ……「かぐや姫の生ひたち」「かぐや姫の昇天」など

と分類できようか。自然に注目しているのは、「菖蒲・月」（枕草子）、「雨」（花月草紙）ぐらいなものである。入門期の教材として、人事面に注目して教材を選定するのには、それなりに理由がある。学習者の成長段階を考えた場合、高校一年生段階では、自然よりも人事に対する興味が強いからである。自然に対する感覚が身に備わるようになるのは、学習者自身の成長を待たねばならないように思える。しかし、以上の点を認めた上で、次の二点で疑問を持た

ざるをえない。

1、中学校の古文教材と比べて、段階的に高まっているか。

2、古文に親しみを持たせようとするあまり、話の面白さに注目させすぎるのではないか。現代との違和感を感じる作品や時間をかけて読まなければならない作品に出会った場合、入門期の教材の面白さの印象が強い分、本格的な古文の読解に際して拒否反応を起こし易いのではないか。

右の1に関しては、資料3（中学校の教科書における「古典単元」教材一覧表）との関連で見えていかなければならない。一つの例を出せば、中学校の三年生においてすべての教科書が「奥の細道」を載録している。旅に駆り立てられる芭蕉の気持ちを読み取ることとは、かなり困難なことと思われるが、それを読解した上で高等学校に入学してきた場合、そこに待っている古文入門期の教材が「児のそら寝」では、内容的に平易すぎないかと思うわけである。昭和六十年版の教科書に「児のそら寝」が多くなっていることに疑問を感じざるをえない。人事面に注目させて古文入門の指導を行うのは非常に有効な方法と思うが、あまりに平易すぎる教材は、その扱いに注意を要するのではないか。

そこで、私は、古文の入門期には次のような基準で教材を選ぶのがいいと思う。

1、現代と古典の同質性と異質性（ものの見方や考え方など）を同時に示しうる教材。

2、読解に耐えうる教材。

3、読解を通じて発見の喜びがある教材。

4、言語事項の面でも古文の入門期指導ができる教材。

5、内容的に幅広く関連の教材が採れる教材。

6、「中学校との関連を綿密にしなから、その内容をさらに発展させた科目である」「国語I」の性格にふさわしい教材。

この基準に照らして、入門期の教材には「枕草子」第二百二十三段（「五月ばかりなどに山里にありく」）などがふさわしいように思う。その理由として

1、内容が適度に平易である。

2、構成がはっきりしている。

3、発見の喜びがある。（冒頭文の「五月」「山里」「ありく」から、昔の風俗・習慣がわかる。）

4、自然に注目させることができる。

5、教材に発展性がある。（「徒然草」第十五段などに）

などの指摘ができる。入門期の教材は人事面に注目するのが有効であると先に述べたにかかわらず、右の理由4をあげたのは自然だけが叙述の対象ではなく、自然と人事がからんでいるからである。また、新学期には、通学路の変化によって自然に対する感覚はかなり鋭敏になっていると考

えられるからである。

「五月ばかりなどに山里にありく」を終えた後に、その内容に関連させて單元「旅——旅と日常——」（資料6を参照）を設定して、それに進む。その「枕草子」と單元「旅」を合わせて、古文の入門期指導と考えるのはどうであろうか。このようにすれば、一教材の面白さを味わうことができるし、「古典を学ぶ初步の段階では（現代文との）連続性を保った形で学習の方が自然で無理なく学習できる」という、先の「学習指導要領解説」の趣旨も生かすことができる。

#### 四

「枕草子」第二百二十三段を教材にするにあたって、言語抵抗を取り除く必要がある。資料4は、江戸時代の国学者萩原広道が行った方法を、大村はま氏が中学校に導入したもののだが、本文の左右に必要な事項を書き込む方式で、この方式をとれば本文のリズムを生かしたまま文意がわかるようになっていく。この方式に拠れば、かなり難しいものでも教材化でき、古文の入門期においても内容中心に教材を選べる利点がある。

さて、古文の入門期の教材として「枕草子」第二百二十三段がふさわしい理由は、「三」で述べた通りだが、冒頭

文の読解で古文の入門期の指導ができるというのが最大の利点である。「五月ばかりなどに山里にありく、いとをかし。」というのが、冒頭の一文である。この中の「五月」「山里」「ありく」に注目させることによって、当時の生活習慣に気付かせることができる。

「五月ばかりなどに山里にありく」のが、なぜ「いとをかし」なのか。「をかし」に結び付く要素として、「五月ばかりなどに山里にありく」の中からいくつの条件があるのかを抜き出させるのである。その作業の中から「五月」「山里」「ありく」に注目させる。生徒の方から出なければ、教師の方から出してもよい。出た（出した）段階で、それぞれの検討を行うのである。「五月の山里」といえば、新緑の頃のハイキングなどを生徒は思い描くはずである。しかも、「ありく」の意味を知れば、いよいよその感を強くするであろう。しかし、実際は違っている。陰暦「五月」といえば、今の梅雨時である。まずここで暦の違いを理解させることができる。梅雨時の山里といえば、うっとうしさに決まっている。なぜ、そこを歩きまわるのが面白いのか、生徒は驚くに違いない。しかも、牛車で移動することを知れば、筆者の出した結論をどのように考えたら解決がつくのか、皆目見当が付かないであろう。冒頭の一文を板書し、その右側に生徒の感想を、左側に筆者の冒頭の一文に繋がる理由を書けば（この段階では、筆者の思いを想像

させて書いておくのもよい)、現代と昔の生活習慣の違いからくる自然への思いが対比的にとらえられるであろう。ここで、資料4の傍注を施した教材を配付すれば、知的興味を喚起させて読解作業に移れるのではないか。

本文の読解を進めるにあたって、まず本文の構成をとらえさせるのがよい。冒頭の一文と残りの部分とは、総轄と事例との関係になっている。それをまずとらえさせる。次に、事例が三つの部分から成っていることをとらえさせ、それぞれ事例A、B、Cとする。

そして、事例の検討を行うのである。事例Aは、牛車から見た眺望のよさに加えて、表面はさりげなく生い茂っている草と従者の歩くのにつれて草の下から思いがけなくはねあがるきれいな水との対照の面白さから成り立っている。ここで、草の下のかきれいな水が何の水なのか、五月から導き出し、五月雨の雨水が思いがけない所に水溜まりを作っていることに気付かせる。きれいな水は涼味を呼ぶ。そして、ここで「五月の山里にありく」のが、梅雨時の珍しく晴れた一日の外出であることをとらえさせるのである。

次に、目的地がなぜ「山里」なのかを考えさせる。梅雨時、家屋の中でも深窓で生活する当時の女性が、最も望むのは自然の中に解放されることであろう。日々人間との交渉に明け暮れる彼女達の喜びの最たるものは、人事から遠ざかった自然との接触であらう。梅雨時の晴れ間を

待ち望んでいたというのも十分想像できる。しかも、「ありく」という時間に制約されず「歩きまわる、出歩く」とができるとなれば、その喜びは倍加するに違いない。

事例Bは、牛車に思い掛けず入ってきた木の枝などを掴んだと思った瞬間、車の動きにつれて手からすると枝が抜けていく。その瞬間的な動作が面白い。同乗者がいれば、にぎやかな笑いが想像できる。何でもないことが、日常からの解放感があるからこそ、喜びや笑いにつながっていく。

事例Cは、車輪におしつぶされた蓬が輪の回るのにくっついて顔近くに香ってくる。その臭いに感じ入っている。これも予想しない出来事であり、些細なことにも筆者の喜びが感じられる。「こんなに近く臭ってくる」とは、蓬が車輪にくっついて回っているのかしら。そういえば、『転蓬(旅の定めない生活・流浪の旅)』も『蓬が転ぶ』と書いたつけ。山里に遊ぶ私達を、『転蓬』に見立てるのは少しオーバーかしら。」という筆者の喜びが伺える。これは、おそらく筆者一人の感想であらう。

事例相互のまとめとして、沢山あったであろう感想の中でなぜこの三つにしばったのか、考えさせるのがよい。それぞれどういう感覚を駆使してとらえた出来事なのか、考えさせれば視覚・聴覚・嗅覚というのが出てこよう。つまり、全感覚を動員して喜びを体得しようとしているのである。

る。現代の我々からすれば何でもよいような出来事に感動するのは、当時の生活習慣に起因するところ大であり、それを理解しないことには古文の作品の享受はおぼつかない。日常生活から解放される喜びは、現代の我々にも通じることであり（現代と古典の世界の同質性）、些細な出来事に対する喜び様は、当時と現代との生活習慣の違いを理解しないことにはとらえられない（現代と古典の世界との異質性）。この両面を同時に示しうる教材が入門期にはふさわしいといえよう。（学習指導案は資料5に示した。）

## 五

「枕草子」第二百二十三段を読み終えた後、内容との関連から単元「旅」を設定してそれに進みたい。

単元「旅」は、その主題を「旅と日常」とする。現代文の中から辻邦生の「近い旅 遠い旅」（東京書籍「国語I」）を、古文の中から「徒然草」の第十五段を選び設定する。単元設定の趣旨は、作品の生命を壊さないように留意し「旅の楽しみは、日常生活からの解放にある。旅先でのさまざまな発見は、人々の精神に清新な息吹を与える。しかし、文明が極度に発達した現代においては、情報の過多・便利さなどにおいて旅の持つ意味が変化してきている。日常生活の延長に旅が位置してしまったからである。古文と

現代文の作品を合わせ読むことによって旅の持つ意義や楽しさについてかんがえさせてみたい。」とする。

辻邦生の「近い旅 遠い旅」は、彼自身の三度にわたるパリ旅行を題材にして、旅に対する思いを記したものである。三度の旅の違いを、次のように記している。

「最初の旅は今からもう十五年も前のことでフランス郵船のカンボジア号で三十三日の航海だった。私は生まれて初めての遠洋航海に胸が躍ったし、赤道直下の国々に小説的な幻想を味わうことができた。

二度目の旅は飛行機で飛んだがパリに着くまで近東や東欧諸国を一月ほど回り道をして、ファンタスティックな経験を重ねていった。

三度目の直行便で、私は初めて東京のにおいを体につけたまま、パリ空港に降り立った。東京は正午だったが日没を追って飛び続けたので、パリではまだ宵の雑踏の残る十時過ぎだった。定刻に着けば八時半のはずであり、芝居にも音楽会にも間に合う時間だった。」このジェット機時代の便利のよさが現代文明の持たらしめた最大の利点であるが、その功罪を

「私はこの△日常▽の感覚が外国神秘化のヴェールをはぎとったことに時代の変化を感じたし、新しい出発の地盤がそこに生まれているとも思ったが、半面、そのことが、物事の真実を直感させる、非日常的な、魂



の、冒険的な昂揚の機会を極端に狭めていることにも  
気づかないわけにゆかなかった。」

と記している。日常生活の延長に「旅」が位置してしまっ  
たために、「旅」の持つ意義や楽しさが見失われていつて  
いる。現代文明に対する筆者の警鐘といってもいいものだ  
が、これを克服するにはどうすればいいのか。

「私たち個人の中でも、日常的な活動の奥底に、深い、  
ひとりきりの、生死と魂の領域を持っている。私たち  
がビジネスや日常的交際のほかに、真に愛や友情で結  
びつく人間関係を願うのは、この深い魂の次元での交  
流によって、私たちが真に人間らしさをとりもどすこ  
とを知っているからである。」

と述べ、「この深い魂の次元での交流によって」他国の文  
明が理解できる、つまり低い「日常」の眼で西欧の社会を  
見るのではなく、西欧の文明を作り出した「人間精神のひ  
たむきな在り様」には深い共感を寄せ」ることによって、旅  
の意義が回復できると説いている。

この辻邦生の文章は、現代の旅の難しさを説いて興味深  
い。文章の明晰さに加えて、文章の構成もはつきりしてい  
るので、表現の趣旨はとらえやすい。しかし、彼のいう  
「西欧の文明を作り出した『人間精神のひたむきな在り様  
には深い共感を寄せ』」ることによって、現代の旅が失い  
つつある旅の意義・楽しさが回復できるという意味内容は、

海外旅行の経験のない生徒には、かなり難しい言葉であろ  
う。この文章を単独で読むより、次の「徒然草」第十五段  
と合わせて読むことの方が、辻邦生の文章も生きてくるよ  
うに思える。旅が本来持っている楽しさを、実に的確に表  
現しているからである。

いづくにもあれ、しばし旅だちたるこそ、目さむる心  
ちすれ。

そのわたり、ここかしこ見あるき、あなかびたる所、  
山里などは、いと目なれぬ事のみぞ多かる。都へたよ  
り求めて文やる、「その事かの事、便宜に、忘るな」  
など言いやるこそをかしけれ。

さやうの所にてこそ、よろづに心づかひせらるれ。  
持てる調度まで、よきはよく、能ある人、かたちよき  
人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。

寺・社などに、しのびてこもりたるもをかし。

（「徒然草」第十五段）

ここには、旅における発見の喜び・解放感・叙情的な心  
遣いなどが、心にくいまでに表現されている。旅の本来持  
っている効用とは、このようなものをいうのであろう。そ  
れをまずおさえておいて、旅の本来持っている効用が失わ  
れつつある現代の旅を考えさせる方がわかり易いのではな  
いか。具体的な指導計画は、資料6に示した。

（六八頁へつづく）

三省堂	2. 獵師 仏を射る				3. 井筒にかけし					1. (北越雪譜) 熊、人を助く		
教育出版	1. 児のかいもちひ				2. かぐや姫の誕生 3. かぐや姫の成長 4. 天人の迎え 5. 翁との別れ							
光村図書							1. 月のいと明きに	2. 応長のころ	3. (玉勝間) もろこしの故事			
大修館					1. なよ竹のかぐや姫			2. 仁和寺にある法師				
明治(精選国語)						4. あづき下り 5. 筒井筒 6. 猪の尻					1. 門出 2. くまのりのもとに 3. 帰京	
右文書院							2. 菖蒲・月		1. (花月草紙) 雨			
旺文社	2. 絵仏師良秀	3. 楊梅大納言の失言	4. 源義家衣川にてへ運歌のこと	1. かぐや姫の生ひたち								5. 百人一首

## B 解説文のないもの

ジャンル 作品名		説話						物語				随筆		日記	歴史	(解説文)
社名	作品名	今昔物語	宇治拾遺物語	十訓抄	古今著聞集	竹取物語	伊勢物語	大和物語	平家物語	枕草子	徒然草	花月草紙	更級日記	常山紀談		
東京書籍 (新選国語Ⅰ)		1. ちごのそら寝	3. 安養の尼の小袖									2. 鷹の羽にすむ虫			古文を読むために	
東京書籍 (改訂「国語Ⅰ」)		2. 猿沢の池の龍のこと				3. なよ竹のかぐや姫 4. 天の羽衣					1. 龜山殿の水車				古文を読むために	
明治図書 (基本国語Ⅰ)		2. 児とかいもちひ								1. 五月の山里					春はあけぼの (田中澄江)	
筑摩書房 (「国語Ⅰ」改訂)		3. 馬盗人		2. 田舎の児			1. 姨 4. 太曾の最期								古典を読む (秋山 虔)	
角川書店 (「総合国語Ⅰ」改訂)							2. 橋合戦						1. 竹芝寺伝説		なぜ古典を学ぶのか (山田俊雄)	
角川書店 (「精選国語Ⅰ」改訂)		1. 絵仏師良秀				2. かぐや姫の昇天									古典と現代語 (吉川泰雄)	
尚学図書 (「国語Ⅰ」改訂版)		1. ちごのそら寝 2. 絵仏師良秀													古文と現代文 cf. 「徒然草序段について」	
尚学図書 (「新選国語Ⅰ」改訂)		2. 長峰宗貞の家													古文と現代文 cf. 「徒然草序段について」	
第一学習社 (「新国語Ⅰ」二訂)		1. ちごのそら寝 2. ちごのそら寝	1. 安養の尼の小袖			3. かぐや姫の生ひたち									古典の学習 古典を読むにあたって	
第一学習社 (「国語Ⅰ」二訂)		2. ちごのそら寝									1. 仁和寺にある法師				古典の学習 古典を読むにあたって	
大修館 (「国語Ⅰ」改訂)															(古典を読むために1～10)	

## 「国語 I」における古文入門単元、教材一覧表（昭和60年度版）

## B 解説文のないもの

社名	ジャンル 作品名		説話			物語			随筆			日記	歴史	
	今昔物語	宇治拾遺物語	十訓抄	古今著聞集	竹取物語	伊勢物語	大和物語	平家物語	枕草子	徒然草	花月草子			
三省堂 （「新国語 I」）	2. 盗人にも 増さる心					3. 井筒にかけし					1. (北越雪譜) 熊、人を助く	更級日記	常山紀談	
三省堂 （「国語 I」）		3. 応天門 炎上				2. 東下り								1. 古典の響き (昌頭文) ・源氏 (桐壺) ・方丈記 ・平家物語 ・曾根崎心中
教育出版 （新訂「国語 I」）		1. 児のかい もちひ			2. かぐや姫 の誕生								3. 太田道灌 歌道に志す	
光村図書 （「国語 I」改訂）		1. 児の そら寝 2. 師良秀									3. (玉勝間) もろこしの 故事			
大修館 （「国語 I」改訂）	5. 兵立ちたる 者～				1. なよ竹の かぐや姫					2. 仁和寺に ある法師 3. 名を聞く より 4. 高名の木 登り				
明治書院 （「精選国語 I」新修）			1. 安養の尼 の小袖					2. 忠度都落 3. 木曾の最期						参考 祇園精舎
右文書院 （「国語 I」改訂）									2. 菖浦・月		1. 雨 4. (雲津雜 談) かんにん 5. (方丈記) ゆく河の流れ		3. 山吹の花	
旺文社 （「国語 I」）		1. 絵仏師良 秀	2. 楊梅大納 言頼雅卿 の失言	3. 源義家衣 川にて～ 運歌のこと									4. 太田持資 歌道に志 すこと 5. 百人一首	
学校図書 （「国語 I」改訂）		1. 児のかい もちひ			2. かぐや姫 の生ひた ち					3. 仁和寺に ある法師				

[illegible]

## 五月の山里（「枕草子」第二百二十三段）

〔陰曆五月の呼称〕

〔山間の人里〕

歩きまわる、出歩く

五月ばかりなどに山里にありく△

ひじょうに おもしろい

一面にたいそう青々と見えて

いとをかし。青葉も水もいと青く見えわたりたる

△補助動詞▽

いて そんな支配もなく

ずつと

に、上はつれなくて草生ひ茂りたるを、ながながとた

まつすぐに

なんともいえず

澄んだ

深いとい

たぎまに行けば、下はえならざりける 水の、深く

うほどではないが 供人

歩くにつれて 跳ね上った

はあらねど、人などのあゆむに 走り上りたる△

△打消▽

いとをかし。

〔牛車〕

〔牛車の、人が乗

左右にある垣にあるものの枝などの、車の屋

ひだり みぎ

る部分〕

折り取る う

形などにさし入るを、急ぎとらへて折らむとする

△意志▽

すつと

〔車が〕

〔手カラ〕

残念なも

ほどに、ふと△過ぎて△はづれたるこそ、いと口惜し

△係り▽

△結

のた  
けれ。  
び▽

押しつぶさ

れた

のが

蓬の、車に押しひしがれたりけるが、輪の回りたる

〔顔〕近くに

におつ

た のも

に、△近ううち かかりたるもをかし。

## 〔「傍注」の施し方〕

ア 右一行目（文脈を明らかにする注）……△印・カタカナ書き。

。〔動詞の上〕

誰ニ・誰ヲ・誰カラ

誰がどこデ・どこニ・どこカラ

。〔名詞の上〕

誰ノ・何ノ

。〔文と文との間〕（接続詞）

。〔その他〕（補充したい語句）

イ、右二行目（語句の意味を明らかにする注）

傍線部。対応する現代語訳。

ウ、右三行目（意味するものを解説する注）

傍線部。語句解説・指示語の内容説明。

エ、左一行目（読み・文法的説明の注）

文法の注だけ〓右二行目に口語訳がなくても、この注だけで十分。

文法の注十右二行目の口語訳〓口語訳の生まれた根拠の確認。（一語一語の対訳を意識化）

オ〓線部分……この単元で整理する助動詞・敬語・音便等。

## 資料 5

### 高等学校国語科学習指導案

教材 枕草子二百二十三段（五月ばかりなどに山里にありく、いとをかし。）

教材観 枕草子二百二十三段は、随想的章段に入る。深窓に育った当時の女性が、たまに外出した時の喜びが素直に表現されている。現代の我々から見れば、ほんの些細な出来事に心底喜んでいる姿は、大袈裟でもあり滑稽でもある。しかし、日夜深窓での起居を強いられ、精神の解放がままにならない当時の女性の生活を考えれば、手放して喜びを表現している気持ちも理解できる。視覚・触覚・嗅覚のすべてを使い、自己を解放してくれるものを、つかみとろうとしている。「五月ばかり」「山里」「ありく」、そのすべてが清少納言を喜ばしたに違いない。的確で色彩豊かな情景描写が、それをものがたっている。

古文の入門期の教材として、この二百二十三段を選びたい。古文入門の教材を選ぶ観点として、以下の点を備える必要があろう。

1. 現代と古典の同質性と異質性（ものの考え方とらえ方・風俗習慣等）を同時に示しうる教材。
2. 読解に耐えうる教材。
3. 読解作業を通じて発見の喜びがある教材。
4. 言語事項の面でも、古文の入門期指導ができる教材。
5. 古語辞典のひき方の指導ができる教材。
6. 内容的に幅広く関連の教材が探せる教材。

枕草子二百二十三段は、以上の条件を兼ね備えている。つまり、

1. 内容が適度に平易である。
2. 構成がはっきりしている。
3. 発見の喜びがある。（冒頭文の読解……「五月」「山里」「ありく」。昔の風俗・習慣がわかる。）
4. 自然（人事に関する感覚に比べて、成長の遅いと思われる感覚）に注目させることができる。（入学期には、通学路など自然が新鮮である。）
5. 教材に発展性がある。（→徒然草15段＝旅の楽しさ）

などの指摘ができる。読解に際して、言語面の抵抗をいかに取り除くかが問題となる。そのためには傍注を施した教材を用意することが望ましい。

#### 本時の指導目標

1. 「五月ばかりなどに山里にありく」筆者の喜びを読解することを通して、古文の入門期指導を行う。
2. 話題・叙述のしかた・本文の構成に注目させ、随筆の読み方を学ばせる。
3. 古語と現代語の違いを理解させる。

# 本時の指導過程

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
<p>1. 本時の学習目標を確認する。</p> <p>2. 冒頭の一文を検討する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・古文の入門期を行うことを告げる。具体的には、「筆者の心情」をとおして「古文の特質」をとらえることを告げる。</li> <li>・冒頭の一文を板書し、「をかし」につながる要素をとらえさせる。</li> <li>・「をかし」が形容詞であることを説明し、現代語での「おもしろい、気持ちがいい」意になることをおさえる。また「ありく」が「歩きまわる、出歩く」意であることをおさえ、「ありく」と「あゆむ」の違いを理解させる。</li> <li>・「五月」「山里」「ありく」が、「をかし」につながる要素であることをとらえさせ、「五月の山里をありく」ことがなぜ「いとをかし」なのか自由に想像させる。</li> <li>・意見が自由に出た段階で、「五月」が夏の季節（梅雨時）に入ることの説明し、古文での季節が陰暦によっていることを理解させる。</li> <li>・陰暦「五月」（梅雨時）「山里にありく」ことがなぜ「いとをかし」なのか、筆者の気持ちを想像させる。</li> <li>・「ありく（歩きまわる、出歩く）」手段が、牛車であることを説明する。</li> <li>・筆者の「五月ばかりなどに山里にありく、いとをかし。」という気持ちが、どのあたりから出てくるのか読み取るところを告げて通読にはいる。</li> <li>・本文の構成に注目しながら、聞くように指示する。</li> </ul>
<p>2. 本文を通読する。</p> <p>3. 本文の構成をとらえる。</p> <p>(1)「総轄」と「事例」との関係をとらえる。</p> <p>(2)「事例」のあらましをとらえる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・冒頭の一文と残りの部分とに分ける。</li> <li>・冒頭の一文が「総轄」であり、残りが「事例」であることをとらえさせる。</li> <li>・三つの「事例」が述べられていることをとらえさせ、事例A、B、Cとする。</li> </ul>
<p>4. 事例の検討を行い、筆者の喜びをとらえる。</p> <p>(1) 事例Aを検討する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事例Aは、眺望のよさに加えて、表面はさりげなく生い茂っている草と草の下から従者の歩くのにつれて思いがけなくはねあがる水との対照の面白さから成り立っていることをとらえさせる。</li> </ul>



<p>(2) 事例Bを検討する。</p> <p>(3) 事例Cを検討する。</p> <p>(4) 事例相互の比較を通して、その特徴をつかむ。</p> <p>5. 古典の世界と現代との同質性と異質性を知る。</p> <p>6. まとめを行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・五月雨の雨水が思いがけず草の下に水溜まりを作っていたことに気付かせる。</li> <li>・事例Bは、牛車に入ってきた木の枝を折り取ろうとして失敗し、残念に思っている筆者の気持ちをとらえさせる。</li> <li>・牛車には、同乗者がいたかどうか想像させ、牛車の乗りかた・定員等、牛車のあらましを説明する。</li> <li>・同乗者がいた場合にぎやかさを想像させる。</li> <li>・事例Cは、車輪におしつぶされた蓬が輪の回るのにくっついて、顔近くかおってくる、その臭いに感じ入っているのとらえさせる。</li> <li>・車輪にくっついて回る蓬から「転蓬（旅の定めない生活・流浪の旅）」を連想し、「山里にありく」自分の姿を「転蓬」に見立てて楽しんでいる筆者の気持ちをとらえさせる。</li> <li>・事例A, B, Cが、それぞれ視覚・触覚・嗅覚をもとにとらえられた「をかし」であることをとらえさせる。</li> <li>・筆者の喜びが、日常の生活からの解放感によっていることをとらえさせ、現代の我々の気持ちにも通じることをとらえさせる。（同質性）</li> <li>・些細なことに喜びを感じるのは、当時の生活形態によるところが大きいことを説明し、現代の我々の生活習慣と異なることを理解させる。（異質性）</li> <li>・生活習慣やものの見方、語彙、語法が異なることを理解させ、古文入門のまとめを行う。</li> </ul>
備	考
	教材は、傍注を施したものを用意する。

名 元 単		次	材 教	
旅 ―旅と日常―				
定 設 旨		領 域	材	
旅の楽しみは、日常生活からの解放にある。旅先でのさまざまな発見は、人々の精神に清新な息吹をあたえる。しかし、文明が極度に発達した現代においては、情報の過多・便利さなどにおいて旅の持つ意味が変化してきている。日常生活の延長に旅が位置してしまったからである。古文と現代文の作品を合わせ読むことによって、旅の持つ意義や楽しさについて考えさせてみたい。		時 数	目 標 (内 容)	
		目 的	目 標 (技 能)	
		言 語 事 項		
1 「徒然草」 第十五段	理 解 古 文 随 筆	1 旅に対する筆者の考えをとらえさせる。 2 旅の持つ魅力について考えさせる。	1 筆者の考えの進め方をとらえさせる。 2 本文の構成をとらえさせる。	・ 語句の意味、用法 ・ 強調表現 ・ 古今異義語
2 「近い旅 遠い旅」 (辻 邦生)	理 解 現 代 文 評 論	1 旅に対する筆者の考えをとらえさせる。 2 現代における旅の困難さ、楽しさについて考えさせる。	1 筆者の強い訴え、警告などをとらえさせる。 2 論理の展開の仕方をとらえさせる。 3 視野を広げ、問題を発見させる。	・ 語句の意味 ・ 事実と意見 ・ 比喩 ・ 接続語
3 感想文 「単元『旅』を終えて」		1 古代人と現代人の旅に対する思いを比較させる。 2 旅に対する自分の考えを書かせる。	1 引用と意見の区別を明瞭にさせる。 2 段落意識を育てる。 3 原稿用紙の使い方に注意させる。	・ 誤字、当て字 ・ 句読点のうち方

## 指導計画

### 第一時

「單元設定の趣旨」説明。

徒然草第十五段の読解。本文の構成をとらえ、旅の持つ効果・面白さについて考えさせる。筆者の考え方が現代でも通用するかどうか、検討させる。

係り結びに注目させ、強調表現の特徴を理解させる。また、古今異義語に注目させ、古語と現代語の違いを理解させる。

### 第二時

「近い旅遠い旅」の読解。二度の旅と三回目の旅とを比較し、両者の違いに気付かせ、その違いをもたらすものの概略をとらえさせる。

### 第三・四時

「近い旅遠い旅」の読解。二度の旅と三回目の旅の内実を比較させ、不便が感動に、便利が無感動に結び付くことをとらえさせる。

### 第五時

旅に対する筆者の考えをまとめさせ、筆者の主張をとらえさせる。また、徒然草第十五段との比較検討を通して、古今を通じて変わらない旅の意義・楽しさをとらえさせる。

### 第六時

「單元『旅』を終えて」と題して、旅に対する自分の思いを書かせる。

(五四頁よりつづく)

## 六

「枕草子」第二百二十三段と單元「旅」を合わせて、古文入門期指導の試案とした。

入門期に留意しなければならないことは、古文を学習する意義を自覚させることであり、古典の世界と現代の世界との同質性と異質性を認識させることである。むしろ、両者の異質性を明確にする方が効果的かも知れない。しかし、その異質性が言語面だけに注がれるのであれば、入門期の指導にはならない。また、古文を学習する意義を提示しないまま生徒を古典の世界に導き入れたとしたら、生徒にとって古文がいつまでも身近な存在とはならないであろう。教材の難易、言語面の学習、単元の構成等広く目を配り古文の入門期から効果的な学習指導を目指したいものである。